

争論 地域の雇用を協同組合が守れるのか、つくれるのか

非営利組織・協同組合への期待と不安



竹信 三恵子

和光大学現代人間学部教授

聞き手：杉本貴志（本誌編集長・関西大学商学部教授）

事務局：長壁 猛（くらしと協同の研究所）

生協・協同組合とのかかわり

【杉本】 長く朝日新聞の記者として労働問題に斬り込んでこられた竹信さんですが、日本協同組合学会などでお話をされたり、協同組合関係の雑誌に寄稿されたりもしています。そもそも生協・協同組合との接点はどこにあったのですか。

【竹信】 「神奈川ネットワーク運動」が1990年代ごろから無償労働（アンペイドワーク）に関心を持ち、取り上げていたのですが、日本の労働は主に女性が抱えているアンペイドワークを無視して仕組みができていて、そのためにワーク・ライフ・バランスもできないし、女性が働けないことの元凶だと私も思っていたので、関心がありました。私自身、新聞社の長時間で不安定な労働時間と子育ての狭間でとても苦しんでいたこともあり。それで神奈川ネットワーク運動の勉強会に参加させていただくようになり、生協活動にも同じつながりのなかで、関心を持ちました。

お付き合いしていくうちに、プラスの意味とマイナスの意味の両方の関心が出てきました。「考えていることはおもしろいし、可能性もあると思うけど、実際にやっていることは、どこか矛盾がある」という感じがあったので、研究会の中でも、かなり議論になりました。違和感の元は、無償労働を無償のままにしておくのか、必要な部分

はしっかり有償に切り替えていくのかという点で、「生協やワーカーズは市場経済とは異なる協働の論理で動いているのだから有償性にはこだわらない」という空気が当時の神奈川ネットの人たちに感じられた点だったと思います。勉強会では、無償労働に詳しい久場嬉子さん（当時東京学芸大教授）らも「文化人」として参加されていましたが、久場さんとも、「協働だから有償にこだわらない、というところがどうもわからない」と話し合ったことがあります。いまは、あちらの方々も変わっているかもしれません。

実際、生協などで働いている人たちの中には、その報われ方に疑問を持っていると、その声も少なからず聞いていた。ところが、それを言おうとすると、「協働性がわかっていない」「市場原理にとらわれている」などと言われて発言を封じられるというのです。

それ以来、「協働という掲げている理想が、どうして現実の活動では必ずしもうまく反映されないのか」ということを私なりにいろいろと考えざるを得なかった、という体験から入っています。

【杉本】 そうすると、生活協同組合でいえば、生活クラブなどですか。

【竹信】 生活クラブとか、ワーカーズ・コレクティブですね。

【杉本】 アンペイドワークという視点から

入ると、生活クラブに限らず、生活協同組合には共同購入における班の存在など、アンペイドワークを前提として成り立っている部分もあり、その矛盾したところがおもしろいとも言えると思います。

【竹信】 そういう思いもありましたが、同じ無償労働に関心があっても、当時の勉強会で多かった意見は「無償労働を有償化するのではなく、そのまま評価してほしい。貨幣に依存しない経済体系が必要なんだ」といったことだったと思います。私や久場さんのような「外部」から参加した側からは、「それも必要だが、労働者の権利というものは尊重すべきではないのか。本当に関係が対等で共同性だけでやっていける人たちだけが参加しているなら有償化にこだわる必要はないが、そうでない人たちがいるならその存在を直視して、正当な報酬を払うべきではないのか。ヘタをすれば、夫の経済力を前提に女性の労働力を買い叩くようなやり方につながりかねず、そこを無視して『無償労働でいいんだ。貨幣経済に頼らないんだ』というのはちょっと違うんじゃないか。それは貨幣経済に頼っていないんじゃないかと、夫の収入を通じて、本当は貨幣経済に頼っているんじゃないのか」と感じていた時期だったと思います。

【杉本】 つまり、女性たちのワーカーズ・コレクティブのような運動について、新しい働き方を提起しているという点では非常に興味深いけれども、現実の資本主義社会のなかで勝ち取ってきた労働権などの問題に対して、まだまだ不十分ではないか、あるいは、それが問題意識になっていないのではないかと、ということに違和感を覚えられたのですか。

【竹信】 当時はそうですね。現在は、だいぶ変わっていると思いますが、当時は会社員男性の雇用が安定していて、夫の経済力

は磐石と考えられていた時期ですから。それもあって、労働者の権利とか言う、「私たちは『雇い・雇われる』関係じゃないんだから」と切り返されてしまう。でも、本当にそうなら、なぜ生協などで働く人の間に、労働条件や自身の発言権に不満を抱く人たちがでてくるのでしょうか。それは、その人たちが「雇われ人根性」で「高潔な使命を理解していないから」なのでしょう。それは、実は「雇い・雇われている」関係になってしまっているのに、「共同性」といった言葉でそれを覆い隠しているのではないのか。そうした疑問が、もやもやしたまま、頭を離れなかったんですね。入り口はそこですが、男性が多い労働者協同組合でも、そういうきらいが垣間見えるケースがある。両者に共通しているのは、新しい働き方をしたいと思っているのに、リソースを発見するときに、既存のリソースを使わざるを得ないということです。既存のリソースの中でも無償で使い勝手のいいものを利用していくわけです。そこは、実は既成の価値や社会システムに依存していただけないか、そういう疑問がありましたね。

労働者協同組合運動の問題

【杉本】 日本における労働者の協同組合は、いま挙げられたように、「男性たちの労働者協同組合」と「女性たちのワーカーズ・コレクティブ」の2つが並行して展開して来ました。

【竹信】 そこにも性別役割分業ができてしまっている。これも、よくわかりません(笑)。

【杉本】 「男性たちの労働者協同組合」の運動でいえば、もともと失業対策みたいなど

ころから生まれたということがあって、高齢者の方やいままでの職場を何らかの理由で追われることになってしまった方々が「雇われないで、自分たちの職場を自分たちでつくりたい」ということでした。だから、あえてその立場に立つとすれば、たしかに大企業と比べたら給料も労働条件も悪いのは認めるけれども、もともと非常に不利な立場の方がつくったものであり、いまのところはそういう職しかないのだから、そう簡単に比べてくれるな…ということがあると思います。そこに、どういう可能性をもとめられるでしょうか。

【竹信】 不満が出ていない労働者協同組合もあると思うので一概には言えませんが、私が聞いている範囲で、不満が出ているいくつかの事例でいえば、そもそも利益があがらないとか、賃金がまともに払えないとか、それによって働き手がどういう不利益を被っているかということ意外にスルーしてしまい、「労協という組織を維持するため」ということがすごく優先されていることが問題になっている。それが不満を招いているケースのような気がします。「働く人にちゃんとした生活を保障する努力をしていることや発言権を与えること」には向き合わず、組織を維持することを優先する。

要するに「『雇う・雇われる』という関係じゃないから、働いている人たちの権利は問題にならない」みたいな感じになっていることに、不満を持っているのです。「いいことをやっているんだから、協力してくれなければ困る」みたいな感じですね。たとえば、労働組合をつくったら、理事会などの運営責任者側が反発して、「『雇う・雇われる』という関係じゃないのに」と、被害者意識みたいなものを持ってしまったりとか…。不満を持っている側から見ると、

「会議でも、自分たちの発言がちゃんとできなくて、いつも聞きおだけなのに、『会議をやった』とか言っている。分配についても、透明性がなくて、納得がいかない」という感じです。

経営を取り巻く環境が厳しいなかで、メンバーの我慢に依存するしかなく、大義名分に不満を抑え込んで、しかも「『雇う・雇われる』という関係ではないんだぞ」と言うことによって、問題を直視しないようにしているのではないのでしょうか。指揮・命令をして、賃金を払って、メンバーがそれで生活を立てているなら、それは「雇う・雇われる」の関係に限りなく近いのですから、環境が厳しいなら厳しいなりに、経営を公開し、お互いに腹を割って、市民社会の雇用のルールみたいなことはちゃんと踏まえて向き合わない、解決できない。代替りの解決のスキルがあるなら別ですが、「雇われない働き方」の紛争解決のルールは意外に確立していないのではないのでしょうか。そういうところに、たぶん問題があると思います。

法制化運動の意味

【杉本】 労働者協同組合に限らず、営利企業ではそんなことは日常茶飯事で、「従業員の言うことを聞かなくても当たり前じゃないか」みたいなことはあります。

【竹信】 いえ、営利企業でも、聞いているところはけっこうあります。雇用ルールなら、そうした解決方法を守らないと公序良俗にもとることにもなります。そういう企業は「ブラック企業」といって批判されていますよね。

【杉本】 営利企業の場合、ブラック企業はいくらでもあります。だからといって営

利企業一般が否定されることはありません。「労使紛争がある企業がある、だから株式会社は存在してはならない」とはなりません。ところが、協同組合が非常に苦しいのは、一件でも労働問題みたいなものが起きると、「そもそも協同組合はそういうことを大切にしていたはずではないか」と強く言われて、労働者協同組合全体の意義まで否定されしまうわけです。だから、いまの労働者協同組合の方々は、そういうことを起こしてはいけないということで、立法化運動を進めているのではないのでしょうか。

【竹信】 私の認識は少し違います。営利企業においても、「ブラック企業」等の問題の基本的な解決ルールはあって、労働基準法や団体交渉権などの労使交渉の保障などがそれです。

【杉本】 営利企業にも内部ルールはないのであって、あるのは法律です。

【竹信】 内部ルールがある企業はたくさんあります。就業規則というのは法律をもとにして、労使間で社内の働き方のルールを決めたものです。労働者協同組合についての立法化自体は必要だし、前向きの取り組みだとは思いますが、立法化だけで問題が解決するわけではないのは企業と同じです。紛争は起きうるのだという前提に立って、自分たちの組織をより民主的で、不公平感のないものにしていくのだというスキルの向上をしていくことがないと、立法化してもダメなところはダメですよ。

【杉本】 それが問題だということですね。その点では営利企業も同じです。

【竹信】 営利企業は、無視しているけれども、本当は従わなければいけないことになっています。

【杉本】 労働者協同組合も、そこをもっとはっきりさせたいということで、いま「協同労働の協同組合法」という法律をつくら

うとしています。

【竹信】 でも、あの法律にお互いのオルタナティブな解決ルールは入っているのでしょうか。

【杉本】 労働基準法と同じレベルの権利をきちんと確立しようということで、あの法律をつくらうとしているわけです。

【竹信】 そういう意味なら、そうかもしれませんね。しかし、それは自分たちの内部的な努力でもできたはずですよ。法律がなければできない、というのは問題じゃないですか。法律は、内部ルールの積み重ねの上につくらないと、導入しても機能しにくいんです。

【杉本】 労協の内部努力もいろいろあると思いますが、とにかく個々の労働者協同組合が間違っただけに行かないように、最低限の規範を定め、社会にきちんと認知してもらおうと「協同労働の協同組合法」の成立がめざされています。しかしこの法律ができたとしても、「営利企業でやってはいけないことは、もちろん協同組合ではやってはいけない」ということの再確認ですね。で、その先の話ですが、営利企業ではできないような、「いい働き方」というものを、ワーカーズ・コレクティブであれ、ワーカーズ・コープであれ、労働者がつくる非営利・協同組織は発揮できる可能性があるとお考えですか。

新しい働き方の可能性

【竹信】 可能性はあると思います。生協にせよ、労働者協同組合にせよ、ひとつは「儲からない部門だが、人間生活には必要な公共領域がある」ということがあり、それを満たす試みとしてあるのだと思います。もうひとつは、社会が極端に競争的になっ

て、競争についていけない人は全部捨ててしまう、というような労務管理が職場で横行するようになってしまったということがあります。そうでない働き方の場をつくらないと、社会が壊れてしまいます。非営利・協同陣営は、その2つをなんとかしようと思っているのだと私は解釈しています。環境が厳しいとおっしゃるのはよくわかりますが、同時に、いま挙げたふたつのポイントを充たそうとする場は必要です。今のような政権で、労働の規制緩和が進み、社会的弱者は捨てていくという傾向が強まれば強まるほど、その必要性は増してきます。

ただ、その余地があるのかという話になると、そういう枠組みをつくっていかないと、グローバル化でこれだけ公共的なものが捨てられ、税による公的部門の保障がますます弱体化している状況では、利益にならないが社会生活に必要なものや、競争的に働けない人々の受け皿となる場がどこもなくなってしまいます。だから、そういう受け皿をつくらうということ自体は非常に高く評価しているし、ないと困ると思っています。ないと困るから、誰かが何かをしないとまずいぞという問題意識はまったく賛成です。だからこそ私は、生協や労協といったオルタナティブな組織の労働条件のあり方にこだわるわけですし、頼まれもしないのに外から注文をつけてはみなさんの響聲を買っているわけです(笑)。

では、どうすればいいのか。たとえば「なんとか頑張るって、最低賃金は守りたい。なおかつ、人は捨てない」というように、苦しいけれども頑張っている労協は、たくさんあります。そういうところのやり方を見ていると、地域と運動体を有機的につなげて、競争的でない「もうひとつの社会環境」をつくっている。たとえば地域労組や弁護士たちが協力して労働相談や貧困相談

をして、そこで困っている人たちが働ける場所を作るための協同組合をつくり、これを取り巻く地域社会がその組合に協力して、協同組合に仕事を発注するというふうには、ニーズを吸い上げる情報装置が付いている。加えて「生活できない」理由はいろいろありますから、それを変えていくために政府や自治体に働きかけをして、変えさせたりする機能も持っているケースが多いと思います。

うまくいっていないケースは、その2つの機能が衰退している。つまり、ニーズを吸い上げる装置が弱まっていることをカバーするために「自分たちはいいことをしているのだから我慢して協力しろ」という形でメンバーに過重なしわ寄せをしてしまう。それから、活動を困難にしている仕組みを変えさせていく力が弱いので、環境を変えていくのではなく、働く側にしわ寄せを持ち込んでしまう場合もあるようです。

行政からの委託は、予算を節約するためにNPOなどを利用するといったことが多く、価格を値切られてサービスの質や労働条件がどんどん劣化していってしまいます。公務サービスの委託は、今では雇用劣化の温床のように言われています。労協のなかにも、「それでは単なる行政の財政節約のための下請けじゃないか」などと言われて苦しんでいるという例を聞いたことがあります。

公契約条例を導入していく運動がありますが、これは、「最賃を守れ」とか「役所が職員並みの時給は確保しろ」とか、人間が人間らしい暮らしをできるような労働価格へ向けて賃金が下がりすぎないように仕組みをつくる運動です。こうした動きが活発なら、大変でもそれなりに頑張れる。そんな感じがします。

そのダイナミズムをあきらめてしまう

と、事業を発注する側のいいなりに「ハイハイ、わかりました」となって、そんなときに「雇われない関係なんだから仕方ない」となってしまうと、そのツケが働き手の側にしわ寄せされて働く側が爆発する。

生協における雇用・働き方

【杉本】 非営利・協同においては、労働者協同組合とは別に、消費者の協同組合、農民の協同組合、漁業者の協同組合など、既存の大きな協同組合での働き方という問題があると思います。もちろん、本来であれば、地域に根ざす生協や農協なのだから、地域で雇用することも大切だということになるはずなのですが、最近は大学にも地域の協同組合からの求人票があまり来なくなりました。既存の協同組合における労働や雇用について、どう感じますか。

【竹信】 うちの大学でも、農協に就職すると、「あんな有名大手組織に採用されてよかった」と就職にかかわる教職員たちが喜んでいたりしています。「農協はブランド企業になっちゃったんだ」みたいな感じです。

農協についてはあまり詳しくありませんが、農家の方から、「農協も自分たちの組織の維持のほうに大きなウエイトがかかり始めていて、農家が何を望んでいるかよりも自分たちの維持のほうに関心があるように見える」という不満を聞くことがあります。

生協については、労働組合があるところからは、働いている人たちの不満がこちらに聞こえてくることが多いですね。労働組合をつくったために、そういう声がちゃんと聞こえてくるというのは、いいことかもしれない。ここで聞かれるのは、理事会等の意思決定機関とパートとが大きく離れ

てしまって、パートは雇われる人で、決める人は理事会なんだ…みたいになっていることでしょうか。

パートの人が「自分たちの意見も聞いてほしい」とか「利益の分配に疑問がある」と言ったときに、とても強圧的な態度に出る理事会がある。全体を調査しているわけではないので、これに当てはまらない生協もあると思いますが、問題が噴出するのはそういうタイプの組織だと思います。

先ほどの繰り返しになりますが、儲からないなら儲からないなりに経営状況を参加メンバーに公開をして、分配方法を話し合っていたら、働く側にもやる気や、納得が生まれ、協働性が出てきますから、「賃金は低いが、みんなで頑張ろう」となると思います。そういう声を、「評判が下がる」として隠蔽しようとしたり、意思決定にかかわる人々が「自分たちが働いているからなんとかなっているんだ」「パートのくせになんだ」と言い始めたりすると、協働性は終わりです。

【杉本】 さらに、労組にさえ入っていない非正規労働者が、生協でも3分の1を占めるようになってきました。たとえば個配というかたちで配送する場合は、生協に雇用されている職員が配送することはほとんどなくて、委託になってしまっています。もちろん儲けようとしてやっているのではなくて、「消費者の協同組合なのだから、できるだけ質のいいものを、できるだけ安く供給するんだ。スーパーに負けるわけにはいかない」というので、思いつくのは人件費をできるだけ下げること、その最も簡単な手段は非正規労働の導入ということになるわけです。これをどう考えればいいのでしょうか。「消費者の協同組合なのだから、とにかく消費者の利益を徹底的に追求するんだ」といえば、すごく単純で、わかりや

すいのですが。

【竹信】 それは先ほどお話しした、原点のボタンの掛け違いがあるのではないのでしょうか。たしかに中流層が多くて、都市勤労者の妻たちが担っていた時代には、それでよかったかもしれませんが、いまは中流の勤労者がどんどん分解して、非正規化が進んで、若い世代もそこに非正規で働かざるを得なくなってしまっている。働き方の質の向上が、企業も含めて社会的課題として問われているときに、生協に勤めたら過労死しそうだという若者からの話がたくさん来ています。とくに生協などから委託を受けて配送を担当している部門の若者からは、「もう死にそうです」「これではブラック企業です」といった声も、よく聞きます。

たしかに最初は「生協が向かい合う相手は消費者だ」と言っていたかもしれないけれども、いまのような時代になってしまったからには、社会的責任として質のいい働き方を目指す試みが必要な時期に来ていると思います。まず、委託や非正規で働いている人たちの声を聴いていくことをもっと意識的に持たなければいけないと思います。昔の牧歌的な時代なら、夫の安定収入を基盤にした、無償の人手が潤沢にあり、社会的な悪影響もさほどなかったわけです。けれども、いまはここがどんどん崩れているので、その仕事で自活しなければならぬ人も来ていて、そこが過酷労働となってしまうのはやはりまずいわけですね。

協働性とか協同組合というのなら、そこで働いている人たちの協働性をもっと重視すべきでしょう。たとえば委託の配送のどこがきついのか、それを多少でも軽減するために何が必要かということをしっかり話し合っ、対策を出し合ったりしていく必要があるのではないのでしょうか。

【杉本】 そうなると、委託する側が指揮命

令してはいけないという法的規制があるので、直接雇用のほうがいいということですか。

【竹信】 直接雇用の方がやりやすいですね。営利企業でも、委託にすること自体、問題を見えなくするためにしているのではないかとこの指摘がたくさんありますので、その轍を踏んではいけないですね。また、「協働」をうたうなら、直接雇用だけでなく、事業の重要な担い手でもある派遣や委託の働き手の声も対等に取り上げ、働きやすさのためのアイデアを募ることが必要ではないでしょうか。

労働者の痛みと組合員の痛み

【杉本】 そういうふうな働き方にまで目を配ると、長期的にはわかりませんが、少なくとも短期的には商品の値段が少しは上がるかもしれないし、消費者組合員には何らかのかたちで犠牲を払ってもらわなければいけないことも出てくると思います。

【竹信】 もう、そうなっていると思います。私の知人の非正規の若い人はみんな、「生協は高いから買わない」と言っていますから。

【杉本】 それでも、そうすべきだと…。

【竹信】 そうしないと働き方が劣悪せざるをえないのだというなら、そうするしかないと思います。ただ、働き手の労働条件の悪化か、安くてよい商品の提供かの二者択一なのかという問題設定事態に疑問はありますが。

【杉本】 そこで難しいのは、この格差社会のもと、生協の組合員でも年収300万円以下という層が増えています。そうなると、その層の期待にも商品供給の部分で応えようとして、コスト削減で委託や非正規労働

にする。そうすることによって格差社会を助長している面もあるかもしれませんが、とにかく商品供給では低価格化をめざして頑張っている。それを逆転させてしまうと、たしかに働き方では生協・協同組合は頑張っていると評価されるかもしれないけれども、「利用できるのは中流以上の人たちだけじゃないの」ということになってしまいます。

【竹信】 現状では、あれだけ労働条件を抑え込んでいても、もう、そうになっていますけどね。たとえばですが、付加価値の高いものを収入の高い人たちに売ることによって、それによる利益を働く側に分けることで、再分配の機能を持たせるということもできると思います。

イタリアでは、困難な立場の人たちを雇用する社会的協同組合があって、たとえば、受刑者が社会とつながって、社会復帰が容易になるよう、刑務所でコーヒーの焙煎やビール工場をここが運営しているそうです。大手メーカーから買ったたかかっていたグアテマラのコーヒー農園から無農薬・有機栽培の豆を適正な価格で輸入して、焙煎からパッケージづくりまで、受刑者が担当する。市場に出すときは、スローフード協会や生協を通じて安心・安全なコーヒーとして売られ、一定のブランドを確立している。そういう場合、そうしたコーヒーを買う人たちというのは、そんなに低所得ではないでしょう。あるいは、低所得の人でも、「付加価値が高くて、体によくて、受刑者の社会復帰につながるものならば、全部は無理でも、コーヒーだけでも」といって買う例もあるかもしれない。そういうかたちで、質の高い、オルタナティブ製品をつくったり、提供していく。その代わりに儲かった分は、組織の意思決定者の利益にするのではなくて、そこに参加している人たちが身が立つように公平に分配する。そういう

かたちで雇用をつくるということも、あり得るのではないのでしょうか。

つまり、格差社会のなかで、高所得者のお金を下層に持ってくる装置として生協が機能するということもあり得るのではないのでしょうか。

【杉本】 たとえばフェアトレード製品を取り扱うことも、国際的な収入の再分配ですから、そういうことだと思います。ただ、繰り返しになって恐縮ですが、それでもやはり、「所得が低くて食生活に困っている人に役立つ生協になってほしい」という声はあるし、なんとかそれに応えたいという思いも生協職員にはあると思います。それは将来の宿題にするしかないのでしょうか。

【竹信】 そんなことはなくて、たとえばルートを2つつくればいいのだと思います。こういう方たちは高いものをたくさん買ってくれるから、それで儲ける。その片方で、貧困高齢者のお弁当宅配などで、購入可能な価格であまり悪くないものを提供する。そういう2本柱でお金の還流を図っていくことも、理論的には考えればあり得るのではないかと思います。難しいけれども、とにかく社会が二極化してしまったというのが現状ですから、二極化したものを、消費者に対しても働き手に対してもうまく還元して、再分配し、高い賃金ではなくても、そこそこの賃金と労働条件を維持させる。そういうことに知恵を使う方向性はあると思います。

【杉本】 もともと協同組合運動は、生まれたときからずっと「あれは中流以上の運動じゃないか」と言われてきて、それはやっている方もよくわかっていると思います。でも、「現状ではここまでしかできません」ということで、中流よりも少し上の人たちを相手にして、本当に安心・安全なものを提供してきた。それはそれで意義があった

と思います。あえてひと昔前のワーカーズの人たちの味方をしていけば、おそらく、それと同じことが言えることであって、「たしかに私たちがやっていることは、夫がいる身分としてやっていることだけれども、でも、こうやって新しい働き方を示しているんだ」といって、「賃労働以外の働き方」を示したという点で、私はそれなりに意味があったと思っています。ただ、そこからもう一步、次の段階に行く必要がある。

【竹信】 その時代に、「まあ、いいんじゃないの。意味があるよね」と言っていたのは、中流が増えていた時代だからです。だから、「なんとかすれば中流はもっと増えるんだ。男性はみんな正社員になれるんだ。女性はその妻になっていけばいいんだ」みたいな、そういう層が分厚くなっていた時期が70年代ぐらいだと思いますが、その時代のイメージならば、夫の収入をバックに「賃労働以外の働き方」を実行するというのも共感と呼んだと思います。

でも、70年代後半以降から、じわじわと中流の分解が始まって、それが90年代半ばからの労働の規制緩和で非正規が激増し、ついに決壊してしまった。そういう状態にあるのに、まだそれでいいのか、ということが、いまの時代、問われている。しかも、それができる中流はどんどん細っていくわけですから。やっている方たちも、それがなんとなくわかり始めているから、私みたいな者にも話を聞こうという気になってきているのもしれません。食生活に困っている人に役立つ生協になるために、ひどい労働条件で暮らしに困る人を生み出すとしたら、それは矛盾ですからね。

消費者も働き手も二極化していますから、付加価値の高いものを売ることで、買える層からお金を取ってきて、それをそう

でない消費者と働き手にうまく分配して、低所得層にも納得を得ていくという構図をつくることができれば、それはものすごく支持が集まる。

いまは、どんどん非正規労働者が増えて、働く女性の6割近くがもう非正規です。低賃金です。そのため、働く女性の労働問題の解決を目指す女性ユニオンでも低賃金労働者がほとんどで、組合費収入が足りず、運営費が出なくて、活動が行き詰りつつある。これを打開するために、年収500万~700万円以上の女性も少ないながらも昔より増えているので、そういう人たちに物販や保育園の送迎サービスを提供するとか、何かの仕組みをつくって、余裕のある女性から余裕のない女性にお金を還流してもらうことができないかという案も出てきているわけです。

二極化のなかであり得るのは、お金のあるところからないところへお金を引いてきて還流させる仕組みをつくり直すことです。それを昔は税金でやっていましたが、グローバル化して、企業が税金の安いところへ逃げてしまうようになって、政府の徴税と再配分の機能が衰えつつある。だとすれば、再配分の機能の一部を非営利組織がうまく設計できれば、大きな意義があると思うのです。

二極化の認識

【杉本】 その意味で、いま協同組合陣営に足りないのはリーダーシップですか。

【竹信】 足りないのは社会構造の変化についての認識では…。頭では分かっているけど、二極化を体感していない。「中流社会であることを前提にしたままでも大丈夫なはずだ」と、なんとなく思っている。担い手が

高度成長期の人たちだからです。

【長壁】 中流かどうかは別にしても、「対象としている組合員さん自身はずっと同じ」という認識ではいると思います。ただ、底抜けされていくので、対象の人がどんどんいなくなっていく。共同購入であれば、以前は5人ぐらいで荷受けしていたのが、一人減り二人減り、いまや誰も荷受けに来なくて、個配で無人の家に届けて、配達を済ませる。そういう状況ではなかなか変化を感じにくいことがあり、かえって店舗のほうが、それを感じられるのかもしれない。

【竹信】 でも私は、個配は個配で、すごく意味があると思っています。実は私も、個配も頼むし、店舗にも行きますが、個配の意味はすごくある。運ぶ人は大変で、申し訳ないと思うけど、やっぱりいい商品をちゃんと家まで届けてくれるし、昔と違って、最近の正社員同士のカップルはお金を持っています。貧乏人が共稼ぎしているというケースではなくて、むしろ、お金を稼げる者同士がカップルをつくるんですね。これも階層化です。そうすると、その人たちも個配で商品が来ると、そこからお金を取れるわけです。えげつない言い方ですが、それぐらいの決意がないと、この二極化社会の改善はできないと思っているので、あえてえげつなく言わせていただきます。しかも、あくどい商売をしているわけではなくて、「いい物だから、ほしい」と言ってくれているわけです。やはり冷凍食品などは、生協のはすごくいいですから。

【長壁】 利用高がどんどん減っていますから、だんだん厳しくなるということは職員も実感しています。一方、一定の収入から再分配するという意味では、生協の商品を利用してもらうことによって、その層の人たちから生協が利益を得て、その利益から雇用を増やしていく。雇用を増やすなか

で、賃金を少しずつ上げていく。そういうことは理屈としてあります。利益を全部、内部留保にするのかという点では、ここがまた考え方であって、生協が得た収益を労働・雇用に使うのか、それとも事業拡大のための投資に使うのかなど、いろいろあって、すべての生協が一枚岩ではないと思います。

そこはみんなで考える時期ですが、基本的には、高付加価値の商品を買うことによって利益を生み出して、それを使うことで再分配の機能を持たせる可能性はあると思います。ただ、それは意識をしないと、つくれませんね。

【竹信】 私もそう思います。単に「生協を維持する」とか「そうしないと売れないから」だけでなく、どこからお金を取って、それをどう再分配すれば二極化に対して多少ましなことができるのか…というような見通しがあることは、とても大事です。

英国に雇用型社会的企業を取材に行ったことがあります。ここでは低所得の就職困難者などに雇用をつくるのが使命なので、儲かった分を、雇用した人たちの賃金を支えることを優先している。生協などでいま重要なことは「この二極化と格差の改善のために、流通をどう機能させることができるか」ではないでしょうか。格差是正のための「オルタナティブ流通」とでもいいでしょうか。もしそれを目指すことができるなら、協同組合としての生協の意味はすごくあるし、社会的企業としての意味もあると思います。

なぜ私がイライラするかというと、「せっかくいいところまで行っているのに…。そこを生かして稼いだものを、社会の矛盾を解決する方向で分配する方向で使ってほしいのに…」という気分があって、それを言ってもなかなか伝わらないんですよ。期待があるからいろいろ言いたくなるんですけど

ね。

再分配組織としての生協

【杉本】たとえば利用高に応じた割戻しは、ロッチデール原則でも協同組合の基本中の基本としてあって、別に悪いことではありませんが、やはり個人的な利益の還元という感じがします。おっしゃるように、所得の再分配のようなことは、少なくとも昔はあまり意識になかったでしょうね。

【竹信】それはたぶん中流がどんどん増えていった時代だから、そんなことをしなくても放っておけば利用者は豊かになっていき、その人たちが買ってくれることに対して何か還元しようということだったのでしょね。たしかに二極化のなかで協同組合はすごく大変だというのはわかります。同じような人たちが協同でやっていくのが協同組合ですから、こんなに格差ができてしまったらどうしたらいいのか…というのはよくわかりますが、でも、それをやるのが現在のすごく大きな意味であって、その設計ができたなら、生協運動に対する人びとの信頼感や支援はもっともっと高まるだろうという気がします。

そもそも利用高が多いということは、お金があるということですから、そうした顧客を説得して、「割戻しの分をこのようなことに使いますので、よろしく願います」と言うぐらいの運動ができれば、とても素晴らしいと思います。

【杉本】生協のなかにも、ホームレスの支援施設をつくったり、多重債務者に貸付をしているところがあります。そういう生協の話聞いても、最初は大反対を受けたけれども、やっぱり生協の組合員ですから、最終的には納得するところが多いようです。

【竹信】私はそれ、よくわかります。だって、「そんなの絶対にイヤだ」という考えの人は、とっくに営利企業に行ってますから。ちゃんと説得して、納得できれば、むしろ、いい気持ちややりがいになって返ってくると思います。そういう志のある人がけっこう集まってきているのに、もったいない。それに尽きますね。